

ESDなど内視鏡診断・治療の エキスパートがそろう病院で 地域の先進的なニーズに応える



メディカルトピア草加病院

[消化器内科]

吉田 智彦氏 40歳

ESDによる大腸がん治療にも習熟した吉田智彦氏は、内視鏡の技術を磨くため、大学病院での臨床、大学院での病理学研究、がん治療の専門病院への国内留学と経験を積んだ。そして現在は低侵襲治療のエキスパートがそろうメディカルトピア草加病院で、内視鏡診療部長を務める。自らの技量を地域医療の先進的なニーズに役立てたいと転職した吉田氏の16年間に追った。

吉田智彦氏のキャリアの軌跡

(東京都出身)

- 2004年 昭和大医学部 卒業
昭和大藤が丘病院 初期臨床研修
- 2006年 昭和大附属豊洲病院(現 同大東豊洲病院) 消化器内科
- 2010年 昭和大大学院医学研究科病理系 医学博士
がん研有明病院 内視鏡診療部に国内留学
- 2011年 昭和大附属豊洲病院 内科 助教
- 2014年 メディカルトピア草加病院 入職 内視鏡診療部長に就任

Before 早期発見・早期治療により 消化器がんの根治も目指せる 内視鏡の専門性を磨く

救命救急科の初期対応で 専門性の重要性を実感

ジェネラルな診療ができる医師としての厚みをベースに、これだけはと自信が持てる専門性を伸ばしたい。初期臨床研修で各診療科を回った吉田智彦氏は、自らの10年後の姿をそう定め、さまざまな経験の後、2014年からメデイカルトピア草加病院(埼玉県)で内視鏡診療部長を務めている。

吉田氏は5代続く医師の家系に生まれ、ドイツ留学を経験して開業医になった父の「医師は、努力して患者と真摯に向き合えば感謝される、やりがいのある仕事」といった言葉を聞いて育ち、自然と医師を志すようになった。

もっと専門性を養いたいと感じたのは、初期研修の救命救急科での経験にもとづく吉田氏。「患者さんの初期対応後、専門の診療科に引き継ぐうちに、治療を最後まで完結できる専門性を身につけたいと思い始めました」

初期研修では各科の医師の診療も大いに参考になり、「多様な症状の患者を診る」といったジェネラルな経験は、医師としての核になっていると吉田氏は振り返る。

がんの早期発見・治療に 貢献する内視鏡に興味

研修後は消化管疾患、肝疾患、脾・胆道疾患を扱う消化器内科に入局。化学療法や緩和も含め広範な経験を積む中で、早期発見・早期治療でがんの根治も可能にする内視鏡に興味を持った。

「単純ですが、医師になったからには患者さんを自らの手で治したいという気持ちは強かったと思います。また、先輩に言われた『1例経験して分かる医師もいれば、100例経験しても分からない医師もいる』という言葉をよく覚えています。症例数の多さより、患者との関わりが病気への理解を深め、適切な治療法を選ぶ助けになるとの意味で、症例を病理

学の観点から見直し、適切性を検討する大切さに気づきました」

世界のトップを学んだと同義だと説明する吉田氏。がん専門病院で内視鏡診断・治療を数多く経験し、そこで学んだ手技が現在の内視鏡治療を支えているという。

トップレベルを知るため がん専門病院に国内留学

「私は大学卒業後の10年間で、自分のキャリアをある程度完成させたいと思っていましたから、それまでに多様な経験をするため活発に行動していました」

大学卒業後10年の節目に 新たなキャリアへ

そう話す吉田氏は、学ぶ意欲や内容は環境に左右されると考え、1、2年おきに積極的に環境を変えていった。大学院修了後も一時は大学に戻ったものの、身につけた診断学をがん治療のトップレベルの病院で試し、また内視鏡治療を学びたいと思い、吉田氏はがん専門病院に国内留学した。

「医師のキャリア形成では、やりたい気持ちと正当性が伴えば、『こうあらねば』といったルールは存在しない、私はそう思います。この国内留学も先例はなかったものの、私から医局に目的を説明し、厳しい医局事情でしたが快く送り出してもらいました」

内視鏡でのがんの診断・治療は日本が世界に誇る分野であり、国内のトップレベルに留学すれば、

国内留学から戻った吉田氏は、専門病院で得た知識・技術を大学病院でも実践。それは治療だけでなく、患者の入退院マネジメントなどにも及び、病院のメディカルスタッフとも相談しながら、患者や家族が退院後も安心して暮らせるよう支援を充実させていった。

「私の知識・技術で地域医療に貢献したいと考えていたとき、メデイカルトピア草加病院が内視鏡の診療部長を募集しているのを知って応募。院長の金平永二先生が患者さんを真摯に思う姿にもひかれ、転職を決意しました」